

鷹繫山

からだの中を血液のように流れつづける言葉を行わけにしようとする
言葉が身を固くするのが分かる
ぼくの心に触れられるのを言葉はいやがっているみたいだ

窓を開けると六十年来見慣れた山が見える
稜線に午後の陽があたっている
鷹繫という名をもっているがそれをタカツナギと呼ぼうと
ヨウケイザンと呼ぼうと山は身じろぎひとつしない

だが言葉のほうは居心地が悪そうだ
それはぼくがその山のことを何も知らないから
そこで霧にまかれたこともなくそこで蛇に噛まれたこともない
ただ眺めているだけで

憎んでいると思ったこともない代わりに
言葉を好きだと思ったこともない
恥ずかしさの余り総毛立つ言葉があるし
透き通って言葉であることを忘れさせる言葉がある
そしてまた考え抜かれた言葉がジェノサイドに終わることもある

ぼくらの見栄が言葉を化粧する
言葉の素顔を見たい
そのアルカイック・スマイルを